「自分の身を委ねるということ」（救い主降誕のできごと②）

ルカの福音書１章 26～38 節

クリスマスには、いろいろな人のストーリーがあります。その中でマリヤのものは特別です。マリヤに対するクリスマスの知らせは「おめでとう！」という祝福のことばで始まりました。しかしそれはマリヤにとっての十字架の始まりでもありました。私たちがクリスマスの当事者であろうとするなら、自分をささげる信仰が求められます。それが恵みを受けることなのです。マリヤにとって、自分の身を委ねるということはどういうことだったでしょうか。

“マリアは言った。「ご覧ください。私は主のはしためです。どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように。」…” 38

“マリアは言った。「私のたましいは主をあがめ、私の霊は私の救い主である神をたたえます。この卑しいはしために目を留めてくださったからです。” 46-

①シメオンのことば

“シメオンは両親を祝福し、母マリアに言った。「ご覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人が倒れたり立ち上がったりするために定められ、また、人々の反対にあうしるしとして定められています。あなた自身の心さえも、剣が刺し貫くことになります。それは多くの人の心のうちの思いが、あらわになるためです。」”ﾙｶ 2:34-35

②エルサレム神殿で

“するとイエスは両親に言われた。「どうしてわたしを捜されたのですか。わたしが自分の父の家にいることは当然であることを、ご存じなかったのですか。」…母はこれらのことをみな、心に留めておいた。” ﾙｶ 2:49

③十字架のもとで

“イエスの十字架のそばには、イエスの母と母の姉妹と、クロパの妻のマリヤとマグダラのマリヤが立っていた。” ﾖﾊﾈ 19:25

④息絶える前に

“イエスは、母とそばに立っている愛する弟子を見て、母に「女の方、ご覧なさい。あなたの息子です」と言われた。それから、その弟子に「ご覧なさい。あなたの母です」と言われた。その時から、この弟子は彼女を自分のところに引き取った。” ﾖﾊﾈ 19:26-27

◎思い巡らしてみましょう

・周辺から眺めていることと、自分を委ねて経験することは違います。自分を委ねてこそ経験できる恵みということがあります。そんな経験はありますか。話し合ってみましょう。